



TITLE:

【学会記事】 経済学会特別講演会

AUTHOR(S):

高橋, 真悟; 八木, 紀一郎

CITATION:

高橋, 真悟 ...[et al]. 【学会記事】 経済学会特別講演会. 経済論叢 2004, 174(2): 87-88

ISSUE DATE:

2004-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/45649>

RIGHT:

《研究ノート》

アルヴィ博士のアダム・スミス研究

田 中 秀 夫
村 井 明 彦

京都大学経済学会では、方法論研究会（世話人・田中秀夫）と共催で、去る2003年11月28日に、気鋭のアダム・スミス研究者、アルヴィ博士（James Edward Alvey, JSPS Postdoctoral Fellow, Tokyo University）を迎えて京大会館105号室にてセミナーを開いた。博士の報告タイトルは「アダム・スミスの著作には「秘密の」神学的基礎があったか——目的論，目的因，神の意図，自然の目的および経済学——」“Was there a ‘Secret’ Theological Foundation to Adam Smith’s Work?: Teleology, Final Causes, Divine Design, the Ends of Nature and Political Economy.” というもので、神学的基礎があったという理解にたったものである。

アルヴィ博士は1957年にオーストラリアのブリスベンに生まれ、クインズランド大学で経済学修士まで取得、博士学位をトロント大学で取得している。専攻は経済学と政治学、主著の他に多数の論文があり、教育歴も相当積み重ねて、今日にいたっている。博士はニュージーランドの Massey University, Department of Applied and International Economics からの一時留学中で、現在、日本学術振興会の特別研究員として東京大学に所属して研究生生活を継続中である。

このほど著書 *Adam Smith: Optimist or Pessimist? A New Problem Concerning the Teleological Basis of Commercial Society*, Aldershot, U. K., Ashgate, 2003 が刊行された。本著は、スミス研究において、スミス思想の前提として、カルヴィニズム的自然神学的重要性をますます強調している田中正司教授¹⁾の問題意識と多く重なる内容をもった、透徹した優れた研究で、読者の真剣な応答を待っている。アルヴィ博士の解釈は、神学的前提を強調するという意味で、スミス研究の一つの典型であり、そのようなもの

1) 田中正司『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房，1993年，同『アダム・スミスの倫理学』上下，御茶の水書房，1997年。

として、ホブズ研究におけるフッドの解釈²⁾、ロック研究におけるジョン・ダンの解釈³⁾に対応する位置をしめると見ることができであろう。今回の報告は主著のエッセンスの要約という意味合いもあるもので、以下、準備されたペーパーを基に、報告の要約を掲載し、参考に供したい。なお、この要約は、当日の参加者の一人である村井明彦氏（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程）にお願いした。

アダム・スミスの著作には「秘密の」神学的基礎があったか

——目的論、目的因、神の意図、自然の目的と経済学——

はじめに

ヴァイナーはかつて『道徳感情論』（以下参照指示は TMS）に神が個人の性向を通して個人を幸福に導くという自然の調和的秩序論を見出し、これを『国富論』（同じく WN）の隠れた基礎と考えた⁴⁾。近年この見方の復興が見られ、スミスにおける神学と目的論（theology and teleology）が見直されている。ただ、18世紀に比べると、今日、社会諸科学は世俗化しており、読者はポストモダニズムを拒否して著者の意図を読み取ろうにも解釈上の困難にぶつかる。現代人がスミスの宗教性に対して取る態度は、逸脱と見なすか飾りと見なすかであろう。だがヴァイナーによれば、スミス体系は目的論や「見えざる手」なしに理解できない。スミスにおける目的論に関する評価は過去200年間さまざまであり、19世紀後半までは重視されたが、20世紀に入って世俗化の潮流のなかで軽視され、戦後もこの傾向が強まった。ところが、最近10年で一転して再び重視され始めている。以下8点にわたってスミスの目的論の諸相を検討する。

I 知的背景——目的論・目的因・神のデザイン

「目的論」とは、自然における目的因の働きに関わる。アリストテレスの4原因論中、ここでは作用因と目的因のみが重要で、スミスもこれらを取りあげた（TMS II. ii. 3. 5）⁵⁾。目的論の本質は、部分が全体のねらいを達成させるときに構築の目的と知性を備えた創案者が背後に潜むという点にある。自然自体が目的論的説明を促し、人間に神の創造の意図⁶⁾が何かを探らせてきた。この意味で、デザイン論の基本要素は一神教・自然法などに密接に関わる。

2) Francis C. Hood, *The Divine Politics of Thomas Hobbes*, Oxford, Clarendon Press, 1964.

3) John Dunn, *The Political Thought of John Locke*, Cambridge University Press, 1969.

4) Jacob Viner, "Adam Smith and Laissez-Faire," *Journal of Political Economy*, 35 (2), 1927.

5) 以下、スミスからの引用はグラスゴウ版による（数字末尾は段落の通し番号を示す）。

デザイン論の起源はソクラテス学派、特にアリストテレスにある。自然は偶然にできたのではない、との見方は機械論的な原子論の否定だった。スコラ学派の哲学的自然宗教論も目的論を基礎とする。ストア派がローマ帝国公認のイデオロギー同然となって初期目的論のピークをなしたが⁶⁾、その後は盛衰の周期が見られる。アウグスティヌスがストア派を否定したため、目的論問題は思想史の主流から消えてしまった。ガリレオ裁判で復活し、科学革命期（コペルニクス以降）には原子論とともにストア派も再生した。ニュートンには目的論的な面があり、科学と宗教の一体性を保とうとしている。神学者たちも科学と目的論の両立を図った。18世紀ブリテンでは目的論的見地は正統派的で、自然神学の核心部だった⁷⁾。デザイン論は、デイドロ、ヴォルテール、ヒュームらに攻撃されたが、ブリテンでの影響は小さい。おそらく1859年のダーウィン『種の起源』が転換点だった。同書はデザイン論の別のタームでの言換えと見なせるが、今日では目的論やデザイン論など誰も口にしないのはその影響力の証左であろう。これが諸科学の世俗化と響きあった。とはいえ、スミスの頃には目的論は流行していた。当時のスコットランドでは、自然神学（デザイン論に根ざす）は啓示神学の予備学をなすと見られ始めていた。スミスもグラスゴウ大学で自然神学を講じた。

II スミスの目的論と自然の目的

スミスの目的論を理解する手始めとしては、その自然論がよいだろう。『道徳感情論』で彼は、デザインのねらい、自然の目的、人間の本性（自然）と人間以外の自然との調和性、人間本性の目的が達成される仕方などを論じた。スミスは「宇宙のどの構成部分においても、各手段が、それで生み出そうと意図された目的に、最良の創案によって適合させられているのが見られる」として、個体の維持と種の増殖に自然の二大目的を見出している（TMS II. ii. 3. 5）。ここでは二点に注意したい。まずこれがデザインに関する目的論的議論であること、次に自然の目的はたんに種の自己保存だということである。さらには、目的への前進は人間よりも「神の知恵」によるともされる（Ibid.）。以上を総合すると、神の知恵が宇宙に満ち、自己保存と生殖にすべてが仕える、ということになる。別の所では、人間の性状が神のデザインに従うと述べている（TMS II. i. 5. 10）。造物主（Nature）は目的を定めたばかりか、人間にそれを達成する手段も与えた

6) ストア派の詳細については注15を見よ。

7) Robert H. Hurlbutt, *Hume, Newton, and the Design Argument*, 1963, University of Nebraska Press, revised edition, 1985, p. 188.

ということであろう (*Ibid.*)。「飢え、渇き、両性を結びつける情熱、快の愛好と苦の恐怖」があれば、神の目的など意識しなくてもそれに至る適切な手段をとらせてくれる (*Ibid.*) のである。以上より次の三点が重要になる。スミスによると、① 自然は人に本能を与えて摂理を働かせる (本能が作用因)。よって、② 理性の地位は低い。さらに、③ 目的論の見地と「自然の導き手」たる神は結びついている。ここでは、動機は本能的なのに目的は理性的で、目的論と神学の結合が見られる。人間の性状のうちに、目的論が組み込まれている。

むろんスミスは人間の別の目的も論じている。それは世界の秩序、人間本性の完成と幸福である (*TMS* III. 5. 9)。その背後には自由への視線があり、それは「自然的自由の体系」(*WN* IV. ix. 51) を想起させる。これらが相俟って「人間の栄え」をもたらす⁸⁾。目的も手段も理性的だが、しばしば本能が人間に正しい手段を選ばせる。スミスによると、本能には一貫性があって矛盾はない。欲望の終局的目的は安楽と平静 (*ease and tranquility*) である (*TMS* VII. ii. 2. 11)。自然の一貫性と統一性は神の知恵の表れである (*TMS* II. ii. 3. 5)。スミスの自然観は目的論的なのである。

III 自然の目的の意味または本性

スミスにとって、自己保存には快適性が含まれる。子孫の繁栄も、ただ地球上に人間を殖やすことにとどまらない。これらは別の高次の目的の手段なのである。第3の目的は秩序だが、これは目的にも手段にもなる。その構成要素は、外的安全・内的安全 (正義の体系または「法と秩序」)・階層システムである。さて、われわれは自由には親しみがあるが、スミスの自由概念はやや複雑で、内的正義・法の支配の実行がもたらす心理的安全感もその一要素である。自由は目的でも手段でもある。また、スミスの自由概念は、多くの経済学者と違って「消極的自由」の域にとどまらず、政治・宗教・経済に及ぶ。経済学者たちはふつう、転居や職業などの自由に触れただけでスミスの自由論を理解したと考えるが、これらは経済面での自由というべきで、スミスの自由概念のごく一部にすぎない。

幸福概念も単純ではなく、功利主義も唯物論も超越したものである。幸福は、平静と享受 (*enjoyment*) からなり、それには「人格の自由」と物的充足が必要である (*TMS* III. 3. 31)。後者の必要からは、幸福にとって再分配が重要なことが分かる。ま

8) James E. Alvey, *Adam Smith: Optimist or Pessimist?: A New Problem Concerning the Teleological Basis of Commercial Society*. Aldershot, Ashgate, UK, 2003, p. 2.

た、スミスの完成論には道徳的徳も知的徳も含まれる。完成を示す属性としては、慈愛からブルジョアの徳にいたる上下構造がある。

諸目的の核は安楽と平静で、それぞれ身体と精神の安楽を表す。身体面では、必要の充足に骨が折れたり、極度に困難な課題を追求するなら、安楽はありえない。平静は複合的な心理的概念で、「すべての真実で満足をもたらす享受の基礎」である (*Ibid.*)。平静を破るものは多い。「不協和で支離滅裂な諸現象」が引き起こす「驚異」もその例である (『天文学史』II. 12. 引用時には以下 *HA*)⁹⁾。哲学は、心理的に説得力のある仕方 で個々の自然現象をつなぎ合わせる思考の体系を与えてそれらを説明する手段である。よって、かき乱された精神の「想像力を落ち着かせる」手段として、天文学などの自然哲学の諸体系が現れた。スミスの道徳哲学や経済学も、同様の理由で現れたものである。

IV スミス目的論の基本モデル——内在的目的論 (本能論)

ヴァイナーは人間本性を調和的と見るスミスに注目したが、調和の基礎は、自然の目的の達成に向けられた本能の中にある。

一例を挙げると、スミスは社会契約論に反対し、人は生存のために社会内に生きる、とする。社会は理性が発見したのではない。『法学講義』(同じく *LJ*) で彼は、われわれは常に社会の中におり、理性の計算の結果社会に参入したのではない、と述べる (*LJ* (B) 3)。人間本性には自己保存のために社会的欲望が組み込まれている、と彼は考える。信頼を受け、人を説得し、指導する欲望は、われわれの自然的欲望の中でも最大で、この本能が人間本性に特徴的な能力たる言語能力の基礎である (*TMS* VII. iv. 25; アリストテレス『政治学』1253a. 9-18 も見よ)。スミスはまた、造物主は人間社会に「特別に愛情に満ちた配慮を与える」(*TMS* II. ii. 3. 4) とも考える。社会の維持の手段として、自然は二つの本能を与えた。第1に、正義に基く内的秩序である。これは交換の正義から生じ、憤りがその原因だから、この自然的正義の感覚が法学の基礎をなす¹⁰⁾。第2に、「自然の教説」が権威に自然な保護を注ぎ込む。これは社会契約論や功利主義による階層的社会の基礎づけとは逆である (*TMS* I. iii. 2. 3; *LJ* (B) 344)。よって自己保存、子孫の繁栄、秩序といった目的因はどれも、本能的な作用因に支えられている。

9) *The History of Astronomy*, in *Essays on Philosophical Subject*, eds. by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce, Oxford, 1980. (アダム・スミスの会監修・水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会, 1993年)。

10) Alvey, *op. cit.*, pp. 40-53.

だが、ここからは『道徳感情論』と『国富論』の分裂という「スミス問題」が生じるかもしれない。現代版「アダム・スミス問題」¹¹⁾では、目的論は前著のみにとって重要となる。だが R. クリーアは、後著の経済成長論を基礎にして二著を橋渡しする¹²⁾。重商主義的介入を不要にする「富裕の自然的進展」はなぜありうるのか。成長論の出発点は、自然の諸力が経済成長をおのずから生じさせるという見方にあった。「自然的自由の体系」が成長率を引き上げるためには一定の前提条件があるが、介入はこれを損なうのみである。成長には少なくとも、分業・資本蓄積・秩序とよき統治・投資の自由裁量、の4つの要因がある。クリーアはこれらを本能の問題と見なす。以下、最後を除く3つについて考察する。

① 実はスミスは、分業の原因を人の知恵に帰しておらず、交易の性向に帰している (WN I. ii. 1; LJ (B) 218)。『法学講義』では、この性向が説得欲¹³⁾から生まれると考えている (LJ (A) vi. 56; (B) 221; TMS VII. iv. 25)。自給的家族の中で余剰品が出ると、人を説得するのに贈与を行い、これが常態化すると分業の利に訴えるというわけである。② 資本蓄積は貯蓄次第で、貯蓄は理知ではなく本能（物的獲得への）に根ざす。だが、貯蓄させる情念は理知の計算へと方向づけられた慣習ではなく、よい暮らしをしたいという欲求である (WN II. iii. 28, 31ほか)¹⁴⁾。物的所有では幸福になれないとされるが、虚栄や精巧な品物への関心は肯定されるのである (TMS I. iii. 2. 1; IV. 1. 3, 8)。③ 秩序とよき統治は、個人の自由の、ひいては資本蓄積の前提条件である。スミスは『国富論』第3篇で、これがローマ衰退とともに衰え、その後理知による計算ではなく情念による意図せざる結果として、ゆっくりと再建されたことを示している。

『道徳感情論』の目的論的論調は『国富論』では表面に現れていないが、経済成長が自然の目的の達成を助けると見てよい。経済成長は、理知による計算のみでなく目的因に近づかせる手段である成長の作用因（一連の性向や本能）に基礎をもつ。スミス経済学の基盤には本能論がある。『国富論』は人間本性の諸原理を研究したものというよりも、それを適用したものであって、この諸原理に対する見方は他の著作に遡れば理解で

11) Vivienne Brown, *Adam Smith's Discourse*, Routledge, 1994. James E. Alvey, "Postmodern 'Readings' of Adam Smith's 'Discourse'," *History of Economics Review*, 26, 1997, pp. 155-166 を見よ。

12) Richard Kleer, "The Role of Teleology in Adam Smith's *Wealth of Nations*," *History of Economics Review*, 31, 2000.

13) 上記 TMS II. iv. 25 の表現に従うと、ここでの「説得」には信頼を受けることという含意もある。

14) Alvey, *op. cit.*, pp. 56-63 も見よ。

きる。ただ、彼の経済学に「秘められた」基盤があることは同著のみでも明らかである。神のデザインがあるから、不介入が最良の結果を生むのである。

V 目的論は飾りにすぎないのか

このように目的論を重視することには反論もある。それなしでも分析が成り立つ、たんなる飾りと見る立場である。

よき帰結は「いかに」生じるか。それは理性のおかげではないのか。だが、スミスはこの見方を否定する。理性は一定の役割を果たすものの、決して主役ではない。主役は本能や情念である。世俗的解釈にとっては、それらは作用因であっても目的因ではなく、目的因など存在しない。だから、この見方では「なぜ」よき帰結が生じるかの説明が別途必要である。そして理性の働きが否定されると、この見方の困難はさらに増す。一方スミス自身は幾度も、恵みある結果をもたらすために神が人間の性状をデザインしたと述べているのである。そこで世俗的解釈は、神の関与をスミスのレトリックとして退けつつも別の説明法（多くはダーウィンの自然淘汰論だがハイエクらの「自生の秩序」論も一考に値する）を見出す以外なくなる。レトリック論には、時代の慣行への帰順、『道徳感情論』の原型となった講義に対する宗教的監視、退任後の見解変化の可能性、などの根拠がある。問題は、当時の長老派の伝統においてスミスがどこまで非正統的だったか以上に、彼がどこまで神を仰いでいたかにある。彼はストア派に親近感を抱いていたらしく（TMS VII. ii. 1. 15-47）¹⁵⁾、比較的穏健な自然神学（慈愛ある神を認める）にさえ不信を感じていたとするには論証が求められる。彼は不可知論者でも無神論

15) スミスがストア派を重視しているとする根拠を、アルヴィ氏が掲げる文献の一部から挙げたい。まず、グラスゴウ版『道徳感情論』（“Introduction” in *The Theory of Moral Sentiments*, eds. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford, 1976）の序文で、編者のラファエルとマクフィーは〈ストア哲学の影響〉という節を設け、「ストア派はスミスの倫理思想に根本的な影響を及ぼし」、それには「古代と近代とを問わず他のどんな〈体系〉をもはるかに上回るスペースが割かれている」とする（p. 5）。アルヴィ氏も Alvey, *op. cit.*, p. 260 で、ストア派はデザインの存在を認めたこと、有名な「見えざる手」がエピクテトゥスに由来するらしいことなどを再確認している。また援用された Athol Fitzgibbons, *Adam Smith's System of Liberty, Wealth, and Virtue: The Moral and Political Foundations of The Wealth of Nations*, Oxford, 1995 は、スミスがヒュームの非宗教的見解への応答としてストア派に訴えたことを重視しており、ヒュームはストア派の「見えざる手」を迷信の一種として揶揄したが、スミスは彼の視点を認めつつも、ブリテンの社会がすべての価値の懐疑論的否認から出発する必要はないと考えたストア派であった、と見ている（pp. 19, 29）。スミスはあらゆる点でストア派に従ったわけではないが、その「目的論」的側面の中心部分はストア派に由来するものと考えることができよう。

者でもなかったとすべきで、自然神学を信じていたことは著作の中に見られる多くの根拠からはほぼ確実であろう。

次に、神のデザインの代りとなるものについての説明に潜む問題を考えよう。それは、スミスが人間本性の進化に否定的だったこと、および人間の情念がただ生存に必要なものの以上を生み出すと考えていたことに関わる。目的への、デザインなき自生的な適合過程があるとする、いかに幸福と完成はこの過程に組みこまれているのか。崇高なる適合過程というものを想像できるが、事物の進展がたんなる生存（繁栄に対置される）という道筋をたどる可能性もあるのに実際にはこちらをたどる理由は説明できない。適合過程が複雑になるほど、それが神のデザインになるとスミスが考えた可能性は高まる。問題はなお未解決なままだが、目的論的説明が最も高い蓋然性をもち、いずれにせよそれを排除すれば説明は困難になるだろう。

VI 目的論的方法の拡張例

さて、「基本モデル」以外に、スミスは目的論を ① 歴史論、② ユートピア論（理想の統治体制）、③ それに基づく社会の序列化などに応用している。

まず、① 4 段階論の事例研究として、ローマ没落後のヨーロッパにおけるよき統治の再建論がある。世俗の諸侯は意図せずして自ら破滅に至ったし、封建的教会制度も同様に自己を滅ぼした、とスミスは考えた。彼はここに理性ではなく本能の長期にわたる作用を見出す。② 理想の体制については、以前東京大学のセミナーなどで言及した¹⁶⁾ ので省略するが、『国富論』における政府の 3 つの義務論を超えて、『道徳感情論』における政府の義務論を考慮する必要があることを記したい（WN IV. ix. 51; TMS II. ii. 1, 8）¹⁷⁾。③ 社会の序列化の基準は、ある社会がどれくらい自然の目的を果たしているかにある。したがってそれは、伝統的政体分類論に経済成長論などを加味したものとなるだろう。

VII 自然の秩序に入った亀裂と理性の役割

次に、スミスはアプリオリ主義者か経験主義者かを考えよう。調和論的視点はアプリオリなものだったのか。スミスはバングロス主義者（楽天主家）だといえるのか。

16) James E. Alvey, "Adam Smith's Utopia," *Paper presented at the Komaba Forum*, Tokyo, 18 April, 2001.

17) James E. Alvey, "Adam Smith's Higher Vision of Capitalism," *Journal of Economic Issues*, 32 (2), 1998, pp. 441-442 も見よ。

スミスは自らの道徳理論を経験論的だと考えており (TMS II. i. 5. 10; VII. iii. 2. 6), これは彼の経済学にもあてはまる。だが形而上学的な側面も見られ, A. デニスは, スミスの調和論をアプリオリなものと考えて彼を楽道家と見なす¹⁸⁾。だが, どちらの要素も混ざっていると考えるのが通例だろう。田中正司の言うとおり, スミス体系は二元的である¹⁹⁾。

〔幸福の〕ほかのいかなる目的も, われわれが必然的に彼〔神〕に帰する至上の知恵と神的な恩恵にふさわしいとは思えない。われわれが彼の無限の完全性を抽象的に考察してとりついたこの見解は, 自然のさまざまな作用を検討することでさらにもっと確かになる。(TMS III. 5. 7, 強調はアルヴィ)

幸福を自然の目的とする見方は, この一節の前半ではアプリオリに導かれており, 後半では経験的説明が加えられている(自然神学者風に論じる当時の科学者の叙述を思わせる)。調和ある自然的秩序があり, 経験的根拠はそれを支持する。理解に骨が折れるとしても, 調和は存在するのである。調和に反するかに思われる要素は自然の中の亀裂のように見えるが, それはより大きな調和の一部なのである。不完全性と見えるものは, 自然のさまざまな目的を果たすのに役立つ。自然の「見せかけ」をつなぎ合わせる「見えざる鎖」を認識すれば, 不調和は説明できるようになるだろう (IIA II. 12)。この点で, 人間本性の欠点と見えるものも, 神のデザインになるのである。不調和は実在するが, 「か弱い」理性が成長することでこれが克服されるべきだという点 (WN V. i. g. 24) に, 理性の役割が潜む。自然は助力を求めているのである。

自然の摂理の役割を小さく見積もる人たちは, 立法者の役割を重視する²⁰⁾ が, いずれにせよ, スミスが自然の秩序に完全に満足しなかったことは, 自然と人間理性の相当深刻な緊張関係を示すものだろう。最後に, 経済学における理性の役割と, 「調和的な」枠組内での介入というものがあるのかを論じたい。

VIII 目的論的見解の現代的意義について

経済学という学問や経済学者, また政策当局はなぜ必要で, それらはスミスの目的論

18) Andy Dennis, "Was Adam Smith an Individualist?," *History of Human Sciences*, 12 (3), 1999.

19) Shoji Tanaka, "The Main Themes and Structure of Moral Philosophy and the Formation of Political Economy in Adam Smith" in *The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, eds. by T. Sakamoto and H. Tanaka, Routledge, 2003.

20) Tanaka, *ibid.*, p. 146.

をいかに用いるべきなのか。自然が調和的なら学問は不要なのか。これらの問いに答えるきっかけは、人間の知性がときには混乱をもたらすという点にある。理知の役割は、自然の作用と目的を知ること、経済学は比較的低次の目的に役立つが高次の目的にはあまり役立たないと知ること（経済学者の役割を歯医者にとえたケインズを想起せよ）、スミスの重視する本能の役割を助けること（自由貿易なども意図的に選び取るもの）、さまざまな体系（ドグマ）の危険を嗅ぎ取ることにある（TMS VI. ii. 2. 15-18）²¹。経済学がねらうべきなのは、自然の克服ではなく、それとの共同作業である。また、経済学教育の面からの目的論の意義としては、安易な実証主義による事実の提示を超えた価値の意義を初学者に示すこと、学説はある状況で生まれてその命運は後に変化するから恒久的の真実など存在しないと示すこと、が挙げられよう。最後に、経済思想史の面では、「見えざる手」のたんなる世俗的解釈を超える理解法を、スミス目的論の研究は示してくれるだろう。

21) この箇所でスミスはフランス革命の擾乱を批判したとされる。水田訳、岩波文庫版、下巻、142-143ページを見よ。

【学会記事】

French Accounting and the Globalization : The Impacts of the IAS/IFRS on the French Plan Comptable

2004年7月24日、パリ・ドフィーン大学（パリ第9大学）のクレマン・ガルシア（Clemence Garcia）講師を京都大学経済学部へ迎え、研究集会を開催した。ガルシア講師は、EU 諸国における財務会計制度の諸特徴を、会計基準の国際的調和化の観点から多面的に研究してこられた気鋭の若手研究者である。本研究集会では、国際会計基準および国際財務報告基準の設定・改編がフランス会計制度とりわけプラン・コンタブル（フランス会計原則）に及ぼす影響について、最新の資料や情報も交えて報告して頂いた。参加者は16名、うち学外研究者は8名であった。以下は、報告と討論の概要である。

2002年、EU は、国際会計基準を域内上場企業の統一連結会計基準として採用することを決定した。この決定を受けて、フランスの会計制度には、大規模な改編が加えられることになった。もともとフランスのプラン・コンタブル・ジェネラル（一般会計原則）はドイツ会計制度の強い影響のもとで形成されたものであったが、EU 域内の基準調和化の進展過程では EU 会社法指令がその改編を主導することとなった。今日フランスでは、議会ではなく、国家会計審議会（CNC）が、フランス基準を国際基準に適合させるための作業を進めている。その作業の基礎をなしているのは、「負債」、「資産」、「費用・収益」、「減損償却」の概念である。国際会計基準審議会（IASB）の設定する国際会計基準はこの数年の間に、フランス基準の中に深く浸透していくことになるであろう。しかし、こうした制度改革は他面で、新たな問題を引き起こしている。たとえば、銀行・保険業界の圧力を受けて、国際会計基準第32号および第39号の採用が、EU 理事会によって拒否されている。さらにフランスにおいては、国際会計基準および国際財務報告基準の採用をめぐる、次の2点が大きな問題となっている。すなわち、1つは会計基準と税制（課税所得計算）の関係であり、もう1つは中小企業における国際基準採用のコストである。これらの問題の解決は、今後の議論に委ねられている。

以上の報告に対して、大企業と中小企業（または上場企業と非上場企業）に異なる基準を適用するデュアル・システムを構想することが可能ではないか、英米型の概念フレームワークにもとづく基準設定をフランスにも導入する必要があるのではないかと

いった問題提起が、参加者からなされた。こうした問題提起に対して、ガルシア講師は、フランスにおける現在の制度改革は事実上、デュアル・システムを採用する方向に向かっている、そしてまた、概念書という形で明文化はされていないが CNC の意見書等を通じて基礎概念の構築は図られており、その意味では概念的アプローチにもとづく基準設定がフランスでも実質的に進められていると回答した。

(藤井秀樹)

経済学会特別講演会

2004年10月15日金曜午前に、グラーツ大学のカール・アハム教授（社会学・社会哲学）を迎えてのワークショップがあった。EU の東方拡大をテーマにして、それが生み出す可能性と危険について、幅広い視点から考察された。要旨は以下のとおりである。

THE EUROPEAN UNION AND ITS EASTWARD ENLARGEMENT : RISKS AND CHANCES

Karl Acham

1. EU は2004年5月までに東欧8カ国を加えて拡大している。新しい政治的な発展の一方で、西欧諸国での移住労働者問題や、東欧諸国における西側資本主義の直接的な影響が懸念されている。EU の拡大過程は、経済のグローバリゼーションの時期と重なっているが、ヨーロッパが目指すべき方向はグローバリゼーションにあるのではなく、経済のヨーロッパ化である。なぜなら、グローバリゼーションや規制緩和は平等で公正な状態を保証するものではないうえに、ヨーロッパには社会的な市場経済や生態的な保護を重視する「ヨーロッパ型経済モデル」が存在しているからである。
2. 現在のヨーロッパは、経済のグローバリゼーションが進展していく中、法的規制がない状態で、自由市場や効率性を重視する「アメリカ型経済モデル」を引き継ごうとしている点に問題がある。こうした変化は、ヨーロッパ型モデルの社会的・地域的な安全基準の放棄に至る恐れがある。とくに東欧諸国では、市場経済の発展とともに適切な管理制度の構築と安定化が必要とされている。ヨーロッパ型モデルには、強力なコーポラティストの要素が含まれているが、こうした要素の良い部分を生かし、独自の文化的な政策を獲得すれば、共産主義的思想でもなければ自由至上主義でもない、

新しい第三の道を示すことになる。

3. ヨーロッパにとってグローバリゼーションから投げかけられたもっとも重要な問題は、文化とグローバル化された経済との関係である。とくにトルコが EU 加盟申請者の地位を得た現在、EU が地理的にどこまで拡大するのが議論されている。そこで、「ヨーロッパとは何なのか？」を考えた時、25カ国以上のメンバーを含んだ EU には均一性などまったく存在しないことがいえる。すなわち、文化的多様性がその偉大なヨーロッパの可能性を示す源であり、均一化を図ろうとすればそうしたヨーロッパに対する敵対的な反応が生じることになる。よって、文化的差異を認めることが、今後の EU を系統的に発展させる道筋になるといえる。

(八木紀一郎・高橋真悟)